

赤坂小学校 S.C.

宮本 佐代子

きょうは、心理の視点から児童理解についてお話ができる時間を与えていただきありがとうございます。

この学校における、児童の問題行動の原因となるいくつかの特徴について、具体的なケースを提示させていただきながら、子どもの心の世界はどのようにして成り立つのか、問題行動への理解の仕方と対応について、ご一緒に考えたいと思います。

## 1. はじめに

人は生涯、その基礎となる親子関係がどのようなであったかの影響を受けることとなります。ですから、子どもの問題を考えるとき、親子関係がきわめて大切です。母親との関係は特に大切で、ほどよい関係というのが望ましいのです。あまり厳しすぎず、甘やかしすぎず、その子とそのらしく生きられるような愛情が家庭教育の中で注がれているという関係です。その中でも、子どもはまだ、十分に感情のコントロールができないので、感情や衝動を自分で引き受けることができるように親が導くことも必要です。

このようなことから、子どもが、問題行動（心の危機の信号）を出してくるときは、親子関係を修復したいというメッセージといえます。親に直接出すのは怖いのです。学校は出しやすい場所となります。このままでは、「息切れがしてしまう」、「壊れてしまいそうだ」、「自分らしく生きられない」、という訴えであるともいえます。そして、幼い時期にそれを発信できることは、それだけ悩む力があるということにもなります。

## 2. 子どもの問題行動と原因

まず、子どもの問題行動の背景は、親に対して愛情飢餓感があることです。もう一つは、親の子どもへの理想像があり、その期待に応えようとして、自己実現欲求が不満足な子どもです。

愛情飢餓感を持つ子どもは、親が忙しすぎて寂しい思いをしています。親が共働きをしている、片親である、家族の誰かが病気であるときです。親といっしょにいる時間が少なく、ていねいに関わってくれる人はいないということがあります。習い事もしている。洋服もきれいなのを着ている。外的な環境は整っているのです。けれども親に愛されているという実感が不足している子どもです。どうして、こんなに恵まれているのにうっとうし

い気持ちなのだろうと感じています。この子どもたちの教室での振舞いは、担任とか、副担任、支援員などに嫌なことをして関心をもらいたがります。寂しい気持ち、わかってもらえない気持ちの八つ当たりをしようとしています。

ある小学校の A 君は、ある日の放課後、自分のランドセルをひどく傷つけてしまいました。その日をきっかけに教室でも席の後ろを向いたり、急に立って席を離れたり、大きな声を出し始めました。なぜ、急に自分の気持ちのコントロールができなくなったのか知ろうと、S.C.が声を掛けても逃げるばかりです。「どうせ、わかってもらえないと思っているの」と声を掛けたときは、明らかに、表情と身体に「そのとおり」という反応を見ました。

他の教師が目にも余るものを感じて、A 君と話をしました。父親は長く単身赴任で、まもなく、帰国する予定ですが、今は、母親と二人暮らしです。母親がきちんと向き合ってくってくれるのは、一日に 1 分ぐらいで、「僕はいなくてもいい存在だ」と話したということです。

数週間して、担任から話をしてくることを勧められた A 君が相談室にやってきました。そこでわかったことがあります。ちょうど、ランドセルに傷をつけた頃、父親の帰国に伴って、転居の話があったのです。A 君は転校したくありませんでした。転居に反対しましたが、母親は「父親の仕事の都合だし、私の仕事場にも近くなる」という親の都合で引越しの方向に運ぶというのです。勝手な親に対する怒りを、親から与えられたランドセルに当たりました。今でも仕事熱心な父親と母親です。仕事場に近くなると、いっそう仕事に夢中になる可能性があります。1 分間しか向き合ってもらえていなくても、友だちや好きな遊びやスポーツでなんとかやってこられています。転校して、新しいところで友だちはできるのだろうか、好きな遊びやスポーツもあるのだろうか、それがなくなって自分はやっていけるのだろうか、小さな胸は不安でイライラする毎日です。ほんとうは母親に、このような気持ちをわかって欲しいのです。母親に話してわかってもらえるという期待はとっくの昔にあきらめています。誰かに話せばわかってもらえる、気持ちが楽になるという経験ありません。一人で抱えて、やりきれなく、やけになっていたのです。それは「僕は寂しくて、不安で困っているんだ、助けてほしい」という信号だったのです。

冬休みが明けて、A 君は転校をしなくても良くなっていました。けれども転居したため通学にも遠くなり、父親も母親も自宅にいる時間は少なく、寂しい思いをしていました。いつも親の都合で、物事が決まってしまうことに不満足で、そのような怒りが冷めやらず、担任やクラスメートに向きました。ただ、その怒りや不満を言語化して行って、少しずつ収まっていきました。

二つ目は親の子どもへの理想像があって、それに応えようとがんばっているけれど、心が悲鳴を上げている場合です。子どもは親の子ども像に応えるため、自分のしたいことを我慢して、親のしてほしいことばかりをしています。子どもにも自己実現の欲求がありますので、欲求不満に陥ります。なぜそんなにまでして、親の期待に応えようとするので

ようか。子どもは親がいないと、生きていけませんので、見捨てられることにたいへんな恐れを感じているからです。ですから、自分を抑えてでも言うことを聞こうとします。教室で問題が起こったとき、「親に言わないで」と担任に言うことにも、親をたいへん恐れていることが現れています。親は自分の言うとおりにさせようとして、時には脅したり、勉強をさせるためにがんがん言います。「何々できたら、おもちゃを買ってあげる」とか、「どこどこに連れて行ってあげる」など条件付で自分の子ども像に応えさせようとしています。期待に応えてもらえない場合は、「だからあなたはだめなのよ、そんなことではいけません」と厳しく、つらく当たってしまいます。そのような関わりが度を越したときに虐待になります。子どもはありのままを認めてもらう、受け入れてもらう経験が少ないのです。クラスメートに手を挙げたり、えらそうにする子どもは家庭でも同じようにされている可能性があります。親は「あまり言っていないのですが」と過度な期待を掛けている自覚がないこともあります。ご自分も同じようにがんばったり、踏ん張って来られたからです。期待に応えてがんばるのが当たり前になっているのです。

B子さんは、入学したとたん、落ち着きをなくし、急に教室から出て行ってしまったり、すぐに友だちに言いがかりをつけて、叩いていました。担任の言うことにも耳を貸しません。「ママに電話をしたい」と幼児のような面があるかと思うと、教師にも、えらそうな口を利いて、将来に、不安を感じさせていました。担任も、クラスメートも困り果てていました。その反面、「どうして死んだらいけないの」というように自己観が希薄でした。知的にはしっかりしているけれど、死ぬことと生きていることが区別がつかないほど、現実感も薄く、自分がない状態でした。また、心に安心感が少なく、集団に入ると、落ち着かなく、じっとしてられませんでした。

子どもはなかなか親を悪く言ったりしません。ですから余計に子どものたいへんさが見えなくなります。ゆっくり話を聴いていますと、ほんの些細な言葉の中に、「親が期待に応えさせるためずいぶん厳しいのだろうな」とか、暴力を振るわれているのだろうということがわかります。B子さんもたくさんの勉強や習い事の課題をこなし、母親からの暴言もあったようです。学校側や担任の理解で、S.C.とたっぷりの時間を使い、相談室の中では何をしても叱られませんでした。B子さん中心に時間が回り、我慢を強いられない、親とは違う新しい関係を経験しました。B子さんの心に安心感が内在化していったと考えられます。そのため、序々にではありますが、クラスで気持ちをコントロールできるようになっていったという報告を担当からいただきました。

学年が上がり、時折、困ったこともしましたが、落ち着いていきました。背景にある困難は変わらないようでしたが、小さな心を支えて、時折、寂しそうな表情を見せながらも、いっしょうけんめいがんばっている姿がけなげでした。「もう、一人でだいじょうぶ」という態度が見られましたので、見守るという姿勢を持ち続けました。

### 3. 子どもの心の成り立ちと成長する関わり方

では、このような子どもの心の世界はどのようにしてできるのでしょうか？

子どもの心の世界は身近な人、親または養育者との人間関係で形成されます。もちろんそれだけでなく、生まれながらの素質と人間関係の両方が関わって成り立っています。けれども、特に自分はどのような人間かという自己観、いわゆる自分の世界は親との関係で形成されます。人間は学習能力が高いので、対象と同じことを学習し、取り入れることができます。良い対象のモデルがあればそれを取り入れますし、悪い対象のモデルがあればそれを取り入れます。それはそのモデルしか知らないからです。

通常の母子関係は母親と子どもの相互関係でお互いが成長していきます。ところが、対象である母親が何の反応もしないと子どもはどうなるのでしょうか。また、対象がとても怖かったり、不安定だったらどうでしょうか？母親が何かいつもほかの事に関心があり、子どもに対しては上の空だったらどうでしょうか？子どもはいつも対象を感じながらそれを内在化させていきます。厳しすぎても取り入れるのは困難で、放任は取り入れる対象がないということになります。厳しすぎもせず、放任しっぱなしでもなく、甘すぎもなく、ほどよく母親に関わってもらえた子どもは、心の中に安定した母親像を内在化し、自他の区別ができ、一人でだいじょうぶという安心感が育っていきます。これが十分に内在化していないとき、不安が強くなり、不安定になり、それぞれの発達段階で、課題を乗り越えるための問題が現れます。母親、あるいは母親と同じように近い人との関係がいかほど大切かということです。このようなことから、子どもが問題をあらわす多くの場合、母子関係が影響していると考えられます。

低学年のとき、親は勉強を教えてください。親が必死になりすぎて、ヒステリックになり、怖い顔になります。勉強に集中できないのは、そのせいかもしれません。親には自分が厳しすぎるために勉強に集中できないのだという自覚はありません。子どもに集中力がない、能力が足りないと、ますます攻撃の対象になってしまいます。実際、親は、「どこへでも行ってしまいなさい」「あなたみたいな子は嫌いよ」と脅すため、子どもは見捨てられないため、言うことを聴こうとします。そのようなストレスは学校に来てぼっとしているとか、落ち着かず、席を離れたり、目立つ行動をすることにもなります。友だちをいじめて、八つ当たりもします。

親からあまりにもうるさく言われていると、親の言うことを聴いて、傷つけられるよりは、耳をふさいだ方がよいということで、自分を守る方法を身につけます。そうすると、教師にも同じように耳をふさいでしまいます。「そんなにひどいことを言っていないのにどうしてかしら」と思うようなことがあります。そういうときは、子どもにとって、教師は親と同じになっているのです。「言われていることに耳をふさぐ」のは幼いときから、身につけた傷つかない知恵なのです。親がしていないだろう声かけ(プラスのストローク)や

気遣いをすることが大切になります。けれども、親切に「しんどそうね」と声を掛けても、きちんとその子の心に届くかどうかわかりません。そんな経験がないのですから、耳をふさいでいるのですから、届かないのです。

このように学校で、教師が困ることをしてくる子どもは、家庭で「わかってもらえない」「愛されているという実感がない」寂しさや、ストレスを抱えています。「たいへんなんだ、今まで一人で頑張ってきたけれど、もう限界だ、これ以上は頑張れない、助けてほしい」という信号を送っています。誰もがいい子でいたいのに、学校で、教師やクラスの仲間を困らせる面が外に出てしまうということは、それだけ心が大変だということがいえます。いわゆる行動には必ず訳があります。

だからといって、学校側から、親に話しても、親もなかなか気づけませんし、変わりません。子どもを叱っても、注意してもなかなか変わりません。みんなそれぞれの立場でがんばったり、踏ん張ったりして一生懸命生きています。人にとやかく言われたくないと思っていますし、言ったからといって、どちらも楽になれません。どのようにすればよいかということになります。まず、背景にこのようなことがあるということを理解することになります。子どもは親に対する欲求不満を教師に対して解消しようとしたり、親の代わりに必要以上に愛情を求めてきたり、構ってもらいたくて、攻撃してきているということを理解していることです。そのようなことは、クラスを運営していく上、教師としてどんなにたいへんかお察ししています。けれども、教師が理解している、わかっていることは子どもには救いになります。とはいっても、子どもたち、みんなそれぞれに抱えていることがありますので、全員の背景を理解するのはたいへんです。どの程度クラスで抱えられるのか、ご自分でできることか、副担任や支援員に注目してもらうか、心理に介入してもらうか、それぞれケースによって異なります。自分で抱えないで、そのケースによって、適切な人を判断して、お願いすることで負担が軽くなります。

では、背景を理解した上で、具体的にできることは何でしょうか？

子どもの心が成長できるときは、まず、今の状況、気持ちを充分に話して、理解してもらえた、わかってもらえたというときです。「わかってもらえた」と感じる時、人の気持ちや自分の気持ちに納得できたり、気が済んだりします。説教する、批判する、追い込む、責める、感情的になるという接し方は心を閉じていきます。「わかってもらえない」という経験になりますし、気が済みませんので、ストレスとして溜まっていきます。

困難な状況でも、たとえ、それが変わらないだろう状況でも、だれもわかってくれないと思うより、この世に味方がいる、わかってくれている人がいる、というのは大きな支えになります。先ほどお話したように親の子どもへ理想像があるとき、なかなか良いところを認めてもらったり、ほめてもらうことはありません。悪いところばかり、強調され、ありのままを認めてもらえるときが少ないのです。ですから、誰か一人味方がいることで、今の状況を踏ん張ることができます。

子どもは教師から真剣に向き合ってもらえているという実感を求めています。人は誰もが、私対あなたで向き合ってもらうことを望んでいます。子どもはなおさらです。短い時間でもきちんと向き合ってもらえているという実感があると変われます。良いところも悪いところも、真剣に向き合ってもらえたとき、自尊感情が高くなり、意欲がわきます。

クラスのことを考えると、見過ごすことができないことがあります。やはり注意をすることも大切です。正しいやり方を教える必要があります。その時は、「あなたは何かあってイライラしているのかもしれない。でもそういう形でイライラを解消するのはあなた自身のためではない。よかったら、先生にわけを話してね」と冷静に説明し、5分でも話ができる時間を作るということです。5分間でも子どもにとってはすごくうれしいことです。

それでもなかなか収まらなくて、担任などの手に負えない子どもは、心理の出番ですから、紹介していただくこととなります。やさしいおばちゃんがいるから自由に聴いてもらっていらっしやい、何言ってもだいじょうぶよとか、あそこに行って遊んでいらっしやいなどと言って背中を押していただけると子どもは相談室に来やすいかと思います。

相談室は共に安心していることや、話すことで気持ちを整理したり、楽になったりして、自分で問題を解決できるようになる力をもらいに来るところともいえます。赤坂小学校の子どもにはそれができると感じています。

〈註:ケースは赤坂小学校の児童ではありません。また、個人が特定できないように、本筋はそのまま、内容を変えています。〉